

クロアシアホウドリの楽園を夢見て

伊豆諸島自然史研究会

森由香

団体名 伊豆諸島自然史研究会

事業名 八丈小島におけるクロアシアホウドリの保護研究

無人化した小島からの吉報

東京から約二八〇キロメートル離れた伊豆諸島南部に位置する八丈島。そこから四キロメートルほど西に八丈小島があります。面積は約三平方キロメートルで断崖に囲まれた急峻な地形をしています。この島には少なくとも室町時代には人が住んでいた記録がありますが、過疎化や生活条件の厳しさから、全国で初めて、住民からの請願による全住民の離島が行なわれ、一九六九年に無人島となりました。

住む人がいなくなり、釣り人が磯へ渡る以外は訪れる人もほとんどいなくなった八丈小島では、野生化したノヤギが増えて植物を食い荒らし、土壌を踏みつけることによる荒廃や崖の崩落が進みました。この状況に危機感を覚えた伊豆諸島自然史研究会の調査をきっかけに、二〇〇一年から八丈町によるノヤギの駆除事業が行なわれ、一〇〇頭強が捕獲されました。捕獲できなかったオス数頭を残し事業は終了しましたが、その後の数年で八丈小島はみるみる緑に覆われていきました。そ



八丈小島で繁殖するクロアシアホウドリ。

して、この変化が、誰も想像しなかった嬉しい知らせを運んできたのです。

吉報は、当会のメンバーから電話でもたらされました。二〇一三年四月、

「八丈小島に大きくて黒い鳥が三〇羽以上も上陸している。もしかしたらクロアシアホウドリかもしれない……」。遊漁船の船長が、たまたま八丈小島へ上陸した際に見つけたとのことでした。

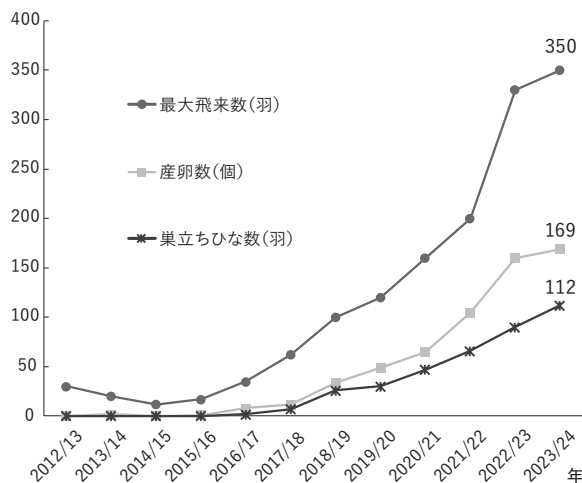
世界最北のクロアシアホウドリ 繁殖地誕生

クロアシアホウドリは、国際自然保護連合（IUCN）レッドリストの準絶滅危惧種に指定されている、翼を広げると二メートルにもなる大型の鳥で、その名の通り、国の特別天然記念物アホウドリの仲間です。アホウドリともども、羽毛を目的とした乱獲などで大きく個体数が減少した歴史を持ちます。普段は大海原で生活し、繁殖の時期に

だけ島に上陸。鳥島、小笠原諸島の鷗島^{むら}列島、尖閣諸島など人の近づけない孤島でのみ繁殖するため、人の目に触れる事はほとんどありません。

この一報を受け、急ぎよ来島した専門家の方々によって調査が行なわれました。その結果、「若い個体が多い」と「盛んに求愛ディスプレイ」といわれる雌雄ペアで行なうダンスの様な行動をしており、この春に繁殖相手を見つけ、巣の場所を決めようとしていること」「秋からの繁殖期に再度八丈小島へやってきて産卵をする可能性がかなり高いこと」などが推察されました。八丈小島がクロアシアホウドリの新たな繁殖地として定着した場合、将来的にはアホウドリもこの島にやってくることも考えられます。関係者たちの胸は高鳴りましたが、同時

に、慎重に対応しなければ、この稀有机会が簡単に失われてしまうという課題への早急な対応も迫られました。繁殖地として定着するには、クロアシアホウドリに安心して子育てができる島だと思ってもらう必要があります。そのためには、環境を守らなくてはな



八丈小島でのクロアシアホウドリの繁殖状況等の推移

りません。そこで、環境省、東京都八丈支庁、八丈町、住民の方たちなどが連携し、八丈小島全域の鳥獣保護区特別保護地区への制定や看板の設置、繁殖期の上陸に対する配慮などの対策が取られてきました。さまざまなできごとを乗り越え、二〇一七年について二羽のヒナが無事に巣立ち、八丈小島はクロアシアホウドリの世界最北の繁殖地となりました。その後も毎シーズン、一喜一憂しながらも年々、繁殖数は増加しています。発見から一二シーズン目となる二〇二四年度の産卵数は二三個となり、沢山のヒナが続々と孵化しています。

■ 守り残すべき大切な場所

八丈小島の近海は波が高い日が多く、定期船もないため渡島が難しく、これまであまり調査は行なわれていませんでした。しかし、クロアシアホウドリ

の調査と並行して、八丈小島の植生や鳥類、爬虫類、陸貝、昆虫などの調査も、各分野の専門家の協力のもと進められていきました。

伊豆諸島では、ネズミ駆除を目的としてイタチが昭和三十―五十年代に放獣され、その結果、島に生息する固有の鳥類やトカゲなどが捕食され、激減しました。

一方、八丈小島はイタチが導入されず、人が住んでいた頃も、自給自足に近い生活が営まれていました。調査結果から、八丈小島は、

人々や物資の移動によって

おこる動植物の移入種が少ない、伊豆諸島本来の植生を色濃く残した貴重な島だということが判明しました。

現在、八丈小島では、ほかの島では数が減って、姿を見ることが難しくな



貴重な自然が残された八丈小島。

ってしまったオカダトカゲも高密度で生息しています。また、イタチだけでなくヘビが生息していないこともあり、天然記念物のカラスバトやカンムリウミスズメ、ウチヤマセンニュウなど鳥

離島人材育成基金助成事業 事務局より

かつては人が暮らしており、現在は無人島となった八丈小島。伊豆諸島自然史研究会は当地で10年以上、クロアシアホウドリの調査や環境整備に取り組んでいます。その甲斐もあり、八丈小島はクロアシアホウドリの世界最北の繁殖地となりました。地域の方が主導し、適宜専門家の助言や指導を受けながら取り組みを進めてきたこの活動は、長い期間にわたる観察や調査が求められる自然科学分野の研究や保全活動において、非常に参考になると言えるでしょう。

また、住民活動の面からは非常に厳しい自然環境が、期せずして伊豆諸島でも稀な生態系の保全につながったという事実には驚くばかりです。この希少な自然を守りながらも、エコツアーなどの形で環境学習の場などにどう活かしていくのか、今後の活動が楽しみです。

自然科学系の研究事業は、住民主導の地域づくりの入り口としてはハードルが高いようで、当助成事業での採択事例は多くはありません。純粋な基礎研究に終始するのではなく、本事例のように、地域住民の参画や今後の地域振興への還元を念頭においた申請に期待しております。

私たちの貴重な繁殖地にもなっています。ほかにも八丈小島でしか見られない陸貝や、絶滅危惧種の植物の生息地でもあります。八丈島の住民、八丈小島の元住民の皆さんはもちろん、クロアシアホウドリやこれらの生き物にとって、八丈小島はかけがえのない場所です。小さな島は環境の変化が起こりやす

く、人為的な影響で取り返しのつかない事態にならないよう、慎重に保全することが求められ、八丈小島も同様です。しかしながら、その認識をしつかりと持った上で島の自然と接することは、環境について考える非常に有意義な機会につながるとも思います。将来的に八丈小島がそのような貴重な環境

学習を提供する場となるためには、島や生き物についての知識や経験、愛情を持った人材の存在が必要不可欠です。今年度の事業では、クロアシアホウドリの生息状況調査に加え、アホウドリ研究者の指導の下、雛への足環装着を実施しました。これにより、八丈小島で生まれた雛が巣立った後、どこに移動しているのか、どの程度島に戻ってくるのかなど、さまざまな知見が得られることが期待されます。八丈小島で生まれ育ったヒナが無事に成鳥となり、島へ帰る日を心待ちにしながら、自然保護や人材育成に向けた活動を続けていきたいです。

森 由香（もり ゆか）

東京都鳥獣保護管理推進員。伊豆諸島で自然の調査を続けてきた研究者や八丈島在住者をメンバーとする伊豆諸島自然史研究会に在籍。クロアシアホウドリの繁殖期には、月に二〜三回八丈小島に渡り、調査を行なう。